

## 集会的フィールドワーク

### - 「群衆の叡智」を活用した地域づくり支援のための一手法の提案 -

堀田竜士<sup>†</sup>, 涌井美帆子<sup>†</sup>, 三井実<sup>†</sup>, 高橋正道<sup>†</sup>

Keyword: 群衆の叡智, フィールドワーク, 地域づくり

#### 1. 背景

「日本は課題先進国である」と言われる通り、日本は今後世界が直面する社会課題を先取りしている[1]. 特に地方に関しては、人口減少や少子高齢化、経済の衰退等が顕著であり、地域コミュニティの生存に向けた課題解決が急務である。

課題解決手段のひとつとして、「群衆の叡智」の活用が有効であると考えている[2]. 群衆の叡智は、適切な状況下においては、集団の中の最も優秀な個人よりも、優秀な個人を含む多様な集団の方が優れた知力を発揮できる、という主張である。特に、ある時点で必ず明快な答えが存在する問題（認知）、集団と自身の行動を適合させる問題（調整）、集団が丸となって何かに取り組むようにする問題（協調）等に関わる課題の解決に有効であると言われている。多様なステークホルダー（課題に関係する当事者）に関わる地域課題の解決に際しては、特に調整や協調の問題が深く関わってくるため、群衆の叡智の活用は有用であると考えている。

群衆の叡智の発生には、以下の4つの条件が担保される必要がある。

1. 多様性：各自が独自の私的情報を多少なりとも持っている
2. 独立性：他者の考えに左右されない
3. 分散性：身近な情報に特化し、それを利用できる
4. 集約性：個々人の判断を集計して集団として一つの判断に集約するメカニズムが存在する

これらを地域課題の解決という文脈で捉え直し、以下の4つの条件が必要であると考えた。

- I. 多様性：多様な参加者を活動に巻き込む
- II. 独立性：各参加者が、地域の課題やその解決策に対して、個別具体的で独自の意見を持てる
- III. 分散性：各参加者が、地域のローカルな情報を入力できる
- IV. 集約性：それらの意見や情報を集約できる

これらを実現する手法として、「集会的フィールドワーク(Collective Fieldwork)」を提案する。集会的フィールドワークを、「多様な参加者が、地域における各自のフィールドワークを通じて、地域に対する個別具体的な気づきを獲得し、更にそれらの気づきを集約することによって、地域に対する多角的で包括的な視点・知見を獲得することを目指す手法」として位置付ける。本稿では、集会的フィールドワークのプロセスやそれを支援するノート的设计、300人規模の被験者へ

の適用を受けて、その可能性や今後の課題について説明することを目的とする。

#### 2. 集会的フィールドワークの内容

##### 2-1. 実施プロセスについて

実施プロセスを表1に示す。集会的フィールドワークは準備、フィールドワーク、内省、気づきの集約の4つのプロセスで構成されている。事前にテーマを設定し、地域内外から募った多様な参加者に、次節で説明する本活動のために作成した専用のノート（フィールドワーク・ノート）を使用したフィールドワークを実施してもらい、テーマに即した気づきをノートに記入してもらおう。フィールドワーク終了後、各参加者にそれらの気づきを振り返ってもらい、自身の視点から地域課題やその解決策に関して内省してもらおう。最後に、各参加者の意見を集約し、地域課題の解決に向けた新たな知見を獲得する、というプロセスで実施する。

表1 実施プロセス

準備	1.地域内外から、年齢や国籍、所属、関心などが異なる多様な参加者を集める
	2.フィールドワーク・ノートを各参加者に配布する
	3.フィールドワークのテーマを決める
フィールドワーク	4.各参加者に対象地域においてフィールドワークを行ってもらい、地域の人々や環境にみられる特徴の観察、または住民との対話などを通じて、様々な情報を収集し、気づきを得る
	5.得られた気づきをフィールドワーク・ノートに記録する
	6.4.5をフィールドワーク終了まで繰り返す
内省	7.フィールドワーク終了後、記録した気づきを見ながら振り返りを行い、得られた気づきについて内省すると同時に、浮かんできた仮説や疑問、次に実施したいアクションなどを考え、フィールドワーク・ノートに記録する
	8.各参加者が記録した気づきを集約し、それらの整理や構造化などを通じて、新たな知見を獲得する

##### 2-2. フィールドワーク・ノートについて

ノートの構成を表2に示す。ノートは3部構成になっている。冒頭には、フィールドワークの経験がない参加者にその方法や留意点を理解してもらうため、説明用ページを設けた。

フィールドワーク時の中心的活動である気づきの記入に関して、松尾(2011)は、経験学習における内省には「行為の中での振り返り」と「行為の後の振り返り」の2つのタイプがあり、その双方を行うことが、新しい知識の創出や次のアクションに対する意識づけに対して効果的であると述べている[3]. ゆえに、ノートには「行為の中での振り返り」を行うための記録用ページと、「行為の後の振り返り」を行うための内省用ページを設けた。

<sup>†</sup> : 富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 コミュニケーション技術研究所  
Communication Technology Laboratory, Research & Technology Group, Fuji Xerox Co., Ltd.

記録用ページは「その場記録」を記入する部分と、「振り返り記録」を記入する部分の2つに分かれており、ノートの大部分を占める。「その場記録」では、フィールドワークのテーマに関わる物事を見つけたり聞いたりしたことを、簡単に記録してもらう。記録方法は写真、イラスト、メモなど、個人に委ねる方針とした。一方、「振り返り記録」では、「その場記録」で記録した体験から得た気づきを記録してもらう。<何に対して>、<どのようなことに気づいたのか>を自身の言葉で記入してもらう。主観的で感覚的な体験に言葉を与える過程で気づきを深めてもらうことを意図し、他人にも理解できる表現で記入することを意識して記録してもらう。また『発想法[4]』を参照し、個々の気付きを用いてテーマに関する仮説抽出を行う際の参考にしやすいよう、フォーマットを設計した。

ノートの後半には内省用ページを設け、フィールドワーク終了後、記録用ページに記入した記録を振り返り、改めて内省した結果気づいたことを記入してもらう方式とした。

表2 フィールドワーク・ノートの構成

1 説明用ページ	フィールドワークの心構えや作法が記載されている部分
2 記録用ページ	その場記録、および振り返り記録を行う部分
3 内省用ページ	記録用ページを見ながら内省した内容を記録する部分

実施プロセス、およびノートの設計に際しては、先述した群衆の叡智の発生条件の1から3に配慮した。4の集約性に関しては、今後の検討課題とする。

#### 1. 多様性

地域内外から多様な参加者の参加を促進するために、それらの参加者に参加の呼びかけを行うことはもちろん、参加意思のある参加者の参加を妨げることがないように、ツールの選択や活動内容の分かりやすさに配慮する必要がある。ゆえにノートは、IT環境が未整備の状況を考慮し、紙のノートとする。各ページに記載した内容や記録フォーマットは、誰もが容易に理解し活動に取り組みやすいよう、できる限り簡易なものとした。

#### 2. 独立性

他者の考えに左右されない、個々人の気づきを抽出できるよう配慮し、フィールドワーク時は基本的に個人、または小集団で実施してもらう。集団で実施する場合も、一人ひとりにノートを配布し、各自の気づきをノートに記載してもらうようにする。

#### 3. 分散性

各参加者が地域における個別具体的な体験ができるよう、研修などの予め行動が規定されている場合を除き、フィールドワークの経路や範囲は指定しない。

### 3. 集合的フィールドワークの適用と期待効果

集合的フィールドワークおよびノートの期待効果を探索する目的で、様々な文脈で約300名の被験者にフィールドワークを実施してもらった。被験者の意見か

ら、集合的フィールドワークには以下の①から④のような効果が期待できると考えている。

- ① 記録をつけながらフィールドワークを実施することが、地域をより詳しく観察する動機づけになる
- ② 地域特有の特徴に意識を向けてフィールドワークを行うことで、地域の新たな側面に気づくことができる
- ③ フィールドワーク中に主観的に感じたことを、書くという行為を通じて振り返り表現することで、獲得した気づきを深めることができる
- ④ 活動を続けるに従って、記録した個々の気づきに共通する観点が徐々に明らかになることで、意識していなかった自身の価値観を再発見できる。その結果、テーマに対する新たな知見を獲得できる

### 4. 今後の課題

3で抽出した期待効果の仮説検証を行う必要がある。また、本稿で対象としなかった群衆の叡智発生の4つ目の条件である集約性を実現する手法が見つからない。特に、紙に書かれた大量の文字を効率的にテキストデータ化する方法、およびそれらのテキストデータを、その後の地域づくりに活用できるように効果的に集約する方法を発見することが望まれる。本活動により集まった大量のデータを集約することで、地域の魅力や課題などの特徴を、多様な参加者の多角的な視点を通じて明らかにすることができ、地域づくりや、他地域に対する差別化に活用できる視点を獲得できると考えている。

### 5. おわりに

従来の地域におけるフィールドワークは、大学等に所属する専門家がその任務を委託され、その成果は報告書という形で行政に提出される、という構図は少なくなかった[5]。こうした活動も重要である一方、実際の地域づくりにおいては、地域住民自身の活動や交流が欠かせない。また、その地域の魅力や課題を含めた特徴を享受するのは、地域住民、またはその地域に訪れる他地域の人々である。ならば、地域づくりの時点からそれらの参加者の意見を集め、それらを地域づくりに活用することが今後求められるであろう。

集合的フィールドワークは、地域内外の群衆の叡智を活用した地域づくりを目指す試みである。今後も目標の実現に向けた活動を行っていきたい。

#### 参考文献

- 1) 小宮山宏：「課題先進国」日本一キャッチアップからフロントランナーへ、中央公論新社、2007
- 2) ジェームズ・スロウィッキ著、小高尚子訳：「みんなの意見」は案外正しい、角川書店、2006
- 3) 松尾睦：「経験学習」入門、ダイヤモンド社、2011
- 4) 川喜田二郎：発想法—創造性開発のために、中央公論社、1967
- 5) 加藤文俊：地域活性のための経験学習プログラムのデザインと実践—豊橋市電沿線におけるフィールドワークを事例として—、地域活性学会 第1回大会 論文集、pp.163-166、2009